

高館・義経堂
(毛越寺境内)

案内のしおり



義軒堂安置 源義軒公木像



みなもとのよし

源 義 経

遮那王

いまからおよそ八百年前、承安三年（一一七三）の秋、京の鞍馬寺にあづけられていた源義朝の九男、遮那王（幼名牛若丸）は十五歳になつた。奥州平泉の藤原秀衡の命をうけ、京都を往復している平泉の豪商金売り吉次は、この非凡な少年遮那王にひそかな期待を寄せていた。

牛若奥州下り

年が明けて承安四年の春、母の常盤に別れ、のち、幼なじみのうつぼとも別れ平家の討手をのがれて、金売り吉次に伴われてひそかに平泉へ旅立つた。途中鏡の宿で元服し、みずから九郎義経と名乗つた。北国の王者秀衡は義経を温かく迎え入れた。王者と天才児の会見は、秀衡の至れり尽せりの歓迎によつて行われた。時に義経年僅かに十六、秀衡は五十一歳であつた。秀衡は館をつくつて義経を住まわせ、文武の修業に励ませた。そのころ義経は、えぞの頭領赤路具に心服され、藤原家の重臣継信、忠信を家臣に加えるなど、あわただしいなかに、武将の器量が、めきめきと磨き出された。

義経の出陣

やがて治承四年（一一八〇）兄頼朝が旗上げしたことを知つた。ついに義経の立つ日が来た。二十二歳のときである。主従合わせて三十二人、黄瀬川の陣に兄頼朝をたずねて、晴れの対面をした。それからの七ヶ年の源九郎義経は、満天下の前にはなばなしくデビューした時代で、用兵鬼神の如く、ついに寿永四年（一一八五）平氏を壇の浦で全滅させた。

再び義経東下り

しかし輝く戦功も空しく、兄頼朝の悪むところとなり、愛妻の静は吉野山で捕えられ、わが身はふたたび奥州秀衡の膝下に身を寄せることになつた。文治三年（一一八七）二月十日、年二十八であつた。

いま、平泉では、この「義経東下り」の行列祭りが伝えられて、若い悲運の英雄をしのんでいる。

その年の十月二十七日、藤原秀衡は兄弟六人を集めて「義経を大將軍として一致團結」を誓わせて、心残りに逝去した。その子泰衡は、父のゆいごんにそむいて、

頼朝のきつい命令に追従し、文治五年（一一八九）うる四月三十日義経を高館におそつた。

悲劇の英雄は、まず北の方と、その子を果たし、その身は持仏堂で凜々しくも悲壯な最後をとげた。年三十一、妻二十二、女子四歳。

この戦で、弁慶は衣川の中の瀬で立往生したという話は今に物語られている。

義經渡海の説

義經或はのがれて蝦夷（北海道）に渡ったとの「源平盛衰記」の説は、広く流布されて興味をそそる。即ち「……一説に蝦夷は、武藏房・常陸房其外の郎徒をつれて、蝦夷の島へ赴き給い、かの国を伐り従え、將軍と成り給えり。因つて今に空殿を嘗み義經大明神とあがめまつるとぞ……」

哀しき丘

丘の上なる一字の御堂—

天を衝き抜く杉の木に悼まれ

過ぎし哀しみこの地に秘められ

断崖に立ち古に誘ふ

下は流るる北上川が

涙に惹かれ處を改め

館も屋敷も水底に沈め

川原は繁る、虫すだくめる草が

かなたに峙つ東稻山は

昔の桜花いまは夢と散り

盛衰の跡ひとり見まもる

振り返りつ踏みしむる小径は

杉の巨木に蟬は啼き移り

立去りがたく古は偲ばる

あ、平泉

- (1) 花の都の おもかけ暮い
 こころ みちのく 平泉
九郎義経 安宅の間に
 しのぶ 静の 舞扇
- (2) 平家 追い討つ ひよどり越えも
 いさお むなし 壇の浦
 きのう 追う身が 追わるる今日の
 旅に ひと声 ほととぎす
- (3) 兄と 慕うた 黄瀬川べりの
 柿の しぶさを 今ぞ知る
 昏れて 時雨れて 夢さえ濡れて
 雲は 流れる 奥州路
- (4) 伽羅の 節に 誰ゆえ惜しむ
 明日の いのちの 衣川
 むせぶ 松風 降る五月雨も
 のこす なきの 光堂
- (5) 夜半の あらしか 矢たけび荒ぶ
 つわものどもが 夢のあと
 露も はかなく 夏草萌えて
 鐘も 暮れゆく 平泉

註 このうたは、歌謡曲として、郷土出身歌手及川三千代さんが吹き込み、新作能「秀衡」と表裏に「夢のソノシート」なっております。おみやげに好適です。

奥州平泉 高館・義経堂

高館は判官館とも申しますが、たかだち、ほうがんだてとも呼ばれます。北上川に臨む丘陵で眺望は平泉第一といわれております。藤原秀衡公が柳の御所の区割のなかに別館を設けて義経の居館としたところはこの丘にあったと伝えられております。

丘の上のお堂を義経堂と申し、源義経公の木像を安置しております。

この御堂は、天和3年(1683年)仙台藩主第4代伊達綱村の建立したもので、そのとき納めた「義経廟上梁文」がいまも残っております。

このお堂にぬかづきますと、勇ましくもスッキリした甲冑姿の若武者義経公が座して、うつむいては、北上川の悠久の流れをみつめるかのように、あおいでは、東山の変わらない連峰を望むかのように佇され、波らん万丈、流転悲運の絵巻きが目の前にくりひろげられて、いっそう涙を誘うのであります。

しばし追憶に時をすごしたあと、まず北上の長流を目の下に、視線を及ぶ限り遠くに放ちやりますと、東山(東稻山)の秀峰が手にとるように望まれます。

昔藤原氏が京都の東山になぞらって、東山と名づけ、満山に桜を植えた名所でかの西行法師が文治2年(1186)はるばる平泉に旅して

ききもせず東稻山の桜花

よし野の外にかかるべしとわ
と詠んだことは、有名な語りぐさとなっております。

さらに目を北上川の上流にさしむけますと

一筋の川が西から北上の流れに合わさるのがみられます。これが衣川で前九年・後三年の役の衣川柵あとは、その上流にあります。この辺の山川草木は、みな昔を物語るようあります。

この台地は、昔は、ずっと東に延びており正面は東側であったといわれておりますが、今は河の流れに台地をけずられてこのようにわずかにお堂の基壇を残すばかりとなっております。

この断崖の崩壊を復旧防護するため、昭和37年から継続4ヶ年の工事がひとまず完了しております。危険ですから御注意下さい。

芭蕉の追憶

江戸時代の俳聖といわれた芭蕉は、元禄2年(1689)5月この高館にも杖をひきました。その「奥の細道」に

「……まず高館にのぼれば、北上川南部より流れる大河なり、衣川は和泉が城をゆぐりて高館の下にて大河に落に入る。泰衡等が旧跡は衣が関を隔てて南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。

諸も義臣すぐって此城にこもり、功名一時の義となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと 笠打敷きて時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

「夏草やつわものどもが夢のあと」

この句の自筆を刻んだ句碑は、毛越寺境内の南大門跡のほとりにあります。

毛越寺にお廻りになり、特別名勝淨土庭園をご観賞のうえ、句碑をお尋ねください。